

「遊子方言」の作者をめぐって

中 野 三 敏

江戸産れの、最初の本格的洒落本として、「遊子方言」をあげ
る事に異論はないと思う。ところが又、これ位、出所経歴のはっ
きりしない洒落本も、ちよつと珍らしい。そこで聊か、作者・板
元等について穿って見たのが、この小論となった。

一 作者について

「遊子方言」の作者として、是迄にその名を公にされた者に、
丹波屋利兵衛、多田屋利兵衛、多田一楽の三者がある。内、多田
一楽は岩崎文庫目録に見えるのみで、取り立てて主張された者で
はない。三者の内、丹波屋利兵衛説が現在最も有力であるが、
(中村幸彦氏、水野稔氏の諸論参照) 私も又、彼を作者とする
ので、先ず丹波屋から記して見る。

イ 丹波屋利兵衛について

彼を作者とする根拠の第一は、平秩東作の「丹波屋利兵衛とい
ふもの、浮世師といふものゝいふことをつくりて、遊子方言と題
して須原屋市兵衛方へ遺しけるを、板行して大に行れたり」V
(幸野若談)という記事にある。更に丹波屋は、万象亭森島中

良の「反古籠」にも「橋守国、書画一覽に伝あり、近眼にて左筆
なり稿本皆自画自筆なり、業を採山に受くと、丹波屋利兵衛語り
きVとある。

東作と申椒堂須原屋との関係は、東作が自分の息子を須原屋に
奉公に出したと言われる位(浜田義一郎氏御指教)で、東作の言
は信用出来る物と見る。又万象亭と東作とは略同時代、同傾向の
戯作者仲間、その仲間内で同じく丹波屋利(理)兵衛と言うは、
同一人物と見做しても無理ではない。以上は是迄にも度々言われ
て来た事でもあった。

ところで、「反古籠」に言う「橋守国Vとは、「大坂名家著述目
録」に拠ると、通称を惣兵衛、延宝七年に生れ、寛延元年に歿した
画家で、享保年中最も活躍した。その著全二十三部、刻板の画に
妙を得たりと言はれる、有名人である。万象亭は、その守国につ
いて、丹波屋から詳しく聞いた物らしい。さすれば丹波屋は大坂
住の出版・著述関係者かと考えられる。そこで「享保以後大坂出
板書籍目録」を見る。享保九年大坂本屋仲間新規加入者十二名の
中に、「南久宝寺町五丁目丹波屋利兵衛Vの名を見る。又、「京

延享元年	三月	女文台綾袋(理)	
〃	二月	出定後語(理)	無窮会本には奥附なし
四年	七月	文章九命(利)	
五年	六月	七夕乙女織(理)	
寛延元年	九月	金魚養玩草(理)	
二年	十二月	難経達言(理)	(寛延二年九月刊)
〃	三月	狂歌不断笑(利)	寛延三年仲夏吉祥日 大坂丹波屋理兵衛(天理本)
三年	七月	弁中辺論述記(理)	序に宝暦壬申(二年)大幻知牌とあり(大日本統載経)
〃	十月	狂歌不断笑(理)	
宝暦元年	三月	金魚秘決録(利)	(寛延四末冬)
二年		月行事となる	
(七五六) 六年	六月	弁中辺論述記(理)	(宝暦二壬申臘月)
〃	六月	書画目錄(理)	(宝暦十二年六月) 小川彦九郎との合板
明和元年	十月	誹諧正辞通(理)	宝暦十一年江戸堀江町二丁目丹波屋理兵衛大坂丹波屋半兵衛他一名合板
〃	六月	俳諧橘中仙(理)	明和元年きのえまの中秋丹波屋利兵衛等(天理本)
二年	三月	大坂丹波屋半兵衛板明詩絶句かるた江戸利兵衛売出し	(明和)
〃		国学指要(利)	(明和元申九月)

〃			五事昆婆婆論(利)半	宝曆十二壬午年大坂丹波屋半兵衛板(早大本)
〃			口科秘囊(利)半	(宝曆十二年冬)
五年			九月 無冤錄述(利)	見返しに明和五年崇文堂の論語有り(無窮会本)
七年			三月 孝経児訓(利)半	(明和七年寅十一月)
八年	三月 割印帳に中通組月行事と記される		六月 解人願広集傳(利)半	(明和七庚寅正月)
安永二年	三月 先行事と記される			

これによると、丹波屋は、享保九年初めて大坂本屋中間に加入し、十五年目の元文三年月行事となつて以来、何度か行事を勤めて、宝歴二年迄その名を見せる。その間、開板願を出した書目は十七部有り(表には全部を記さず)、寛延三年七月に出願した伝書「井中辺論述記」がその最後の物である。

続いて江戸に於ける丹波屋は、「割印帳」によると、元文三年十二月の「絵本珍口記」に大坂・丹波屋利兵衛板 江戸・西村源六売出しVとして現われたのを初めとし、宝歴六年六月の「井中辺論述記」の割印迄、ずつと大坂の板元として、西村を江戸の売出し所と定めて、姿を見せる。ところが宝歴十二年六月の割印には、「書画目録」を小川彦九郎との合板にて、江戸の書肆として板行売出ししているのである。そして、明和二年九月には、江戸の書物問屋月行事となり、それ以後殆んど、吉文字屋・山口屋との三者廻り持ちで、安永二年二月迄月行事を勤めている。その間板行書四部・大坂板の売出し六部を数える。

以上によつて、丹波屋が江戸で活動を始めたのは、宝歴十二年なる事は確実だが、ここで、宝歴十二年十月割印の俳諧作法書「俳諧正辞通」(早大図書館蔵)を見ると、その奥付けには、八宝歴十一年辛己歳九月既望・京都建仁寺町加賀屋卯兵衛 江戸堀江町二丁目丹波屋理兵衛 大坂心斎橋南詰丹波屋半兵衛Vとある。是に拠つて、理兵衛の江戸での活動は、宝歴十一年から確実であり、その住所も知れる。

次に、明和二年九月に月行事となつた事に注目する。宝歴十一年に出板活動を始めて、僅か四年目の秋である。しかもその後九年間、殆んど前記三者での廻り持ちで勤めている。月行事という責任ある地位につくには、当然それ相應の学識・経験を要するであらう事想像に難くない。吉文字屋・山口屋は共に宝歴初年から月行事を勤めて来ている。とすれば、この丹波屋理兵衛には、江戸での四年間の経験に、加えるに大坂での約三十年に渡る経験を以てする事、当然であらう。江戸での四年間は、江戸の土地に慣

れる為の時間と見て適當である。かくして、私の頭の中では、大坂の丹波屋と江戸の理兵衛が一体となり、「遊子方言」の稿を成している図が出来上ったのである。

但し、宝歴二年から十一年迄の十年間の内、何時頃理兵衛は江戸へ出たか、何の理由で、何をしに、という事になると皆目見当がつかぬ。ただ乏しい資料から推量するに、江戸に於ける理兵衛の板行書は僅かに四部、それも三部迄が他の書肆との合板であり、又、残る一部の、法医学書のはしりとも言ふべき「無冤録述」も所見本には奥附を欠くも、見返しに、崇文堂（前川六左衛門）の識語を附する故、彼との合板かも知れず、その他六部は皆大坂心齋橋筋 丹波屋半兵衛の板行書の江戸売出し店となっている事から、恐らく、一族の書肆であろう丹波屋半兵衛の、江戸売出し店として、江戸に出たのではないかと考えられる。しかし半兵衛が大坂書籍中間に加入したのは寛延二年で理兵衛よりはずっと後輩であり、理兵衛は二十才で仲間に加したとしても、此年既に五十才を数える。その老人が今更何を、という考えもある。但しこれも、当時の三都の出版状況を、割印帳並びに大坂書籍目録に拠って見るに、享保十二年より二十一年迄十年間に江戸での売出し惣数七〇七部、その内、江戸板三六二部・京板二四八部・大坂板九六部であり、同年の大坂での出版惣数は一六三部である。又同じく宝歴元年から七年迄に、江戸での売出し惣数七一〇部、その内江戸板三九三部、京板一七一一部、大坂板一四六部であり、同年の大坂での出版惣数は二四五部である。即ち、オリジナルな出版部数では、大坂は江戸の約三分の一にしかならず、又大

坂板の約六割は江戸で売出されているのである。純粹に算盤づくで考えても、大坂から江戸へ進出しようという意欲を燃やすに十分な素地が出来上っていた訳で、理兵衛がその経験を生かして、江戸開拓の為、老骨に鞭うったとしても考えられぬ事ではない。

猶、理兵衛の大坂の一族には、半兵衛の他に丹波屋長四郎と丹波屋清兵衛の二人も考えられる。前者は寛延二年七月に「狂歌不断笑」を出願して、却下された人物であるが、その時の住所は理兵衛と同所である。そしてこの「不断笑」は、すぐ後の十一月に理兵衛の手で出願されて、今度は難なく許されている。又、後者は、理兵衛の名が大坂出版界から消えた宝歴二年に、八南久宝寺町五丁目Ⅴと、理兵衛と同一住所で、月行事として「開板願」に姿を現わし、後宝歴五年頃には「須慶町二丁目」に移っている。

恐らくこの清兵衛が理兵衛の後をついだ物であろう。又、宝歴二年から十一年迄の、何年頃に江戸に出たかと言う事は、どうにもわからない。南久宝寺町の「水帳」でも見つかれば、何かわかるかも知れぬ。又、江戸での理兵衛の住所も、堀江町二丁目迄はわかったが、後が皆目不明である。当時の人別帳等、諸先学の御指教を仰ぎたい。

ロ 多田屋利兵衛について

多田屋利兵衛を作者とする説は、朝倉無声氏によって唱え始められた物で、即ち、南畝の「麓の塵」に著者多田屋利兵衛とあると言はれ、その上「遊子方言」再板本の板元が多田屋である事と、序文に八多田爺謹書Ⅴとある事を以てその証とされた。「麓の塵」は南畝の抄写本で九十巻ほどになるが、安田文庫蔵の原本

は焼失し、文理大本（玉林晴朗・「蜀山人」）も現存不明で、無窮会文庫に五十冊ほどの端本が現存する。その為これを調べたが、朝倉説を確認する事は出来なかった。

多田屋については、「書買集覧」によれば八江戸堀江町四丁目後通三丁目 明和—文政 明和六遊子方言自著Vとある。確かに多田屋は洒落本の板元もやっていたはいるが、それは後述する如く、殆んど寛政期の再板本であり、実は貸本屋が彼の本業なのである。

「絵入読本外題作者画工書肆名目集」の文化五年の条には、八貸本屋世利本渡世の者ニ而手広にいたし候者名前 堀江町四丁目多田屋利兵衛（他に十八名）Vとある。又同書に拠って、文化

五年改めで、貸本屋世話役になっている事もわかる。猶、彼の洒落本出版については、馬琴の「物之本江戸作者部類」に、八寛政八九年頃 当年洒落本の新板四十二種出たり此故に板元を穿鑿せられしに多くは貸本屋にて書物屋は二人あるのみ（馬喰町若林清兵衛と日本橋上総屋利兵衛とであろう）と此時皆町奉行所へ召拿られて遣りなく絶板せられ、そが板元貸本屋は各過料三貫文にて赦れりVという記事が、良くものがたつて呉れる。そこで多田屋の出版した洒落本について、表②を附す。多田屋は自分の出版した本には必ずと言って良い位、蔵板目録を附している。目録は、所見の物で八種類に及ぶ。それを上から順に並べて見たのが、表②である。ここで表②を見て戴きたい。

（表 ②）

多田屋利兵衛蔵板目録

	① 天明九年 一七九九年	② 寛政二年	③ 寛政三年	④ 以 寛政三年 後	⑤	⑥ 以 寛政五年 後	⑦ 以 寛政八年 後	⑧ 以 寛政十年 後
	婦美車紫野 再板	〃	〃	〃	〃	〃	婦美車紫野	〃
	廓中奇譚 再板	〃	〃	〃	〃	〃	廓中奇譚	〃
	辰巳之園 再板	〃	〃	〃	〃	〃	辰巳之園	〃
	廓の大帳 新板	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
天明九年 一七八九年	繁千話 新板	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
寛政二年	遊子方言叙	〃	〃	〃	〃	〃	遊子方言	〃

[illegible]

う。併し、この印記は、私見では、上下合はせて八人生一楽Vと読む可きで、当時の狂詩集等に盛んに用いられた戯れの印と見る可きであらう。これを著者名と考えるのは聊か無理の様である。ただし、当時八一楽Vと称する作者がいなかった訳ではない。即ち、角書に八参考今昔操淨瑠璃Vと記した「外題年鑑」は、その叙末に八宝曆七丑年二月 八十翁一楽Vと署名するが、その人物である。この人は「割印帳」に拠ると宝曆六年九月割印の「竹豊故事」を書いた八浪華散人一楽Vと同一人物であらう事は、その両書の内容からも推定出来る。更にこの人物は、明和八年正月刊の談義本「八尾地藏通夜物語」（国会図書館）の序末に、八浪華散人一楽子Vとして姿を見せる。ところで「大坂書籍目録」を見ると、この書は八地藏通夜物語 作者岡本重碩（江州）出願明和七年四月Vとある物と同一であらう。かくて、浪華散人一楽子とは、江州の住人岡本重碩一楽氏である事が判明した。更にこの人物は「通夜物語」の序文に拠ると、大坂布袋町に住んだ医者であつたらしく、その事は又、同書序末の印記に八藪真医隠Vの四字を用いたのと、「大坂書籍目録」の「竹豊故事」の条に八作者一楽（布袋町）Vとあるに拠つて裏付けられる。思はぬ考証に逸脱したが、岡本一楽即ち多田一楽即ち「遊子方言」著者とする考へは再考を要する事のみ記して置く。

以上で一応、その作者についての穿鑿を措き、次に多田屋の項でも聊か触れた、諸本及び板元について述べる。

二 諸本及び板元について

先ず、私見の諸本を整理して記して見る。

- ① 加賀文庫本 奥附八書林 江戸日本はし万丁 かつさや利兵衛板V 元題簽なし
 - ② 早大本 奥附八書林V 元題簽なし 多田屋目録無し
 - ③ 岩崎文庫本・狩野文庫本 奥附八書林V元題簽無し 多田屋目録④を附す
 - ④ 教育大本 奥附に八書林Vの二字が幽かに跡をとどめる。多田屋目録⑤を附す 元題簽八遊子方言Vと記す
 - ⑤ 東大研究室本 奥附無し 多田屋目録⑤を附す。元題簽なし
 - ⑥ 早大宮川文庫本 奥附無し。多田屋目録無し 元題簽④と同一の物を附す。
 - ⑦ 国会図書館本 日比谷本・大東急本 奥附無し、元題簽無し、多田屋目録無し
- 以上十本を七種に分けて見た。此の他天理図書館にも一本を有するが、目録に拠ると、やはり多田屋目録を持つ再板で、③④⑤のどれかに属する物と思はれる。
- 前述した「幸野茗詠」によると、初板本は中椒堂須原屋市兵衛板と言う事になる。これは、朝倉氏によって、奥附けに八書林Vの二字を残し、その下に幽かに八須Vの字の残る物があるという報告がなされ、裏付けられていたが、決局私見本には、それに該当する物は無い。八書林Vの二字のみを残すとある故、②③④のどれかに属する物と思はれるが、この八書林Vの二字は、①のそれと全く同一であり、又①の、八江戸日本はし万丁Vは埋木と

は見えないので、この②③④は共に、①から書林名のみを削った後刷本と考えられるのである。

更にここで①の年代を考えて見る。南総館上総屋利兵衛の名は、明和から文化・文政迄諸本の奥附けに散見するが、私見の最初は明和五年九月刊の洒落本「惚己夢語」(天理図書館)の奥附けに八小伝馬町三丁目 上総屋利兵衛Vとある物で、これは翌六年の「加古川本草綱目」にも同じ住所附けで出ている。(中村幸彦氏、洒落本の発生)。それが明和九年になると、吉原火災による「加理宅細見」(加賀文庫)に八四日市 上総屋利兵衛Vと記し、更に安永四年刊の読本「赤本智恵鑑」(国会図書館)には八江戸日本橋万町 上総屋利兵衛板Vとなり、翌五年の「烟花清談」(加賀文庫)にも葛重との合板で八日本橋万町Vと記す。越えて天明三年刊の「狂文宝合記」(加賀文庫)には又八日本橋四日市Vと記す事になり、以後寛政末迄ずっと四日市を動かなかったらしい。四日市と万町は、隣合はせの町であり、特に八四日市Vという名は、当時既に、日本橋南詰め一帯の通り名として用いられていたらしいので、安永以降の上総屋の住所は案外一ヶ所だけだったのかも知れぬが、とに角、奥附けに八万町Vと記したのは、安永年中の物以外に見かけない故、この「遊子方言」の①は恐らく安永年中の上総屋再板本であり、②以下は、多田屋の項でも述べた通り、多田屋が上総屋から求板して、寛政三年以後、数度に渡って再板した物であろうと考える。そして、その再板の順序は、奥附けの異同から考えて、大体その番号の順序であろうと考えている。

結局、上総屋板の①が安永年間の刊となれば、私見の「遊子方言」は初板本にあらずという事で、やはり「華野茗談」に言う「須原屋の板を初板と考える可きであろう。では、その刊年は何時だろうか。原本の見えない今、憶測によるより仕方ないが、私は明和二年以後七年迄とする。何故なら、著者丹波屋は明和二年に江戸の月行事となっている。大坂で何度も洒落本の絶板処分を見て来た彼にとって、月行事の自分が洒落本等を発行する事は考えられなかった故、わざわざ、須原屋の所から出した物と考えるのが妥当だと思うからである。明和七年迄としたのは、言う迄もなく、明和八年刊の「虚実馬鹿語」にその書名が見えているに拠る。

ところで「遊子方言」の叙文が、寛保二年大坂で絶板になった、島之内細見の「晴陽英華」(加賀文庫)の序を剽窃した物である事は、既に本田康雄氏の論「『遊子方言』の形態」(金沢大学文学部論集第九巻)に詳しい。原文では八晴陽之遊鳴呼^{シメカ}夫Vとあるのを八北州之遊Vと改刻しただけだが、勿論板本は、全て彫り代えられ、原本の各半丁六行、一行十二字詰めが、各半丁五行、一行十二字詰めとなっている。序文の内容は「赤壁賦」からの文句取り等があつて「晴陽英華」本文の八是年六月之既望泛舟遊浪速之陽Vという書き出しと照応して似つかはしい物となっている。ところが、これが「遊子方言」に附けられたとなると、その本文内容等から言っても、全然必然性が感じられない。序文等という物は、何に付けても大して可笑しくない程度に書いてある物だから、これとても、全然不似合いだと言う訳ではないが、「遊子方言」の本文を書いた作者ならば、当然序文等は

自分の手で書ける筈だし、むざむざと他所から何の關係もない様な序文を持って来る事を許しはしないだろう。考えられるのは、「嶠陽英華」の著者（見返しに南郭先生著と記す）も又、丹波屋であったという事だが、これとても同じ序文を二度も使うという必然性が感じられない。兎に角この序文の問題は、「遊子方言」の作者丹波屋が大坂の書肆であったという仮説をたてた私にとっては、大変な難い事実なのだが、以上の様な理由で、この場合私には、この事実は、単なる板元のさかしらであらうという位にしか考えられないのである。

三 内容的問題

さて、やっと内容的問題に迄辿りついた。そも／＼洒落本は、△形式は狂言本、文体は談義本、素材は浮世草子から出て、小説の進展の結果としてまとまった戯作▽と中村氏は「洒落本の発生」に於いて述べて居られる。更に最近本田康雄氏は「遊子方言」に於ける初期上方洒落本の影響を説かれた。（前記論文）屋上屋を重ねるくらいはあるが、ここで「遊子方言」の先行書としての位置を持ち得ると思はれる物を二つほど挙げる。

第一は、宝暦七年刊・大坂洒落本「新月花余情」（加賀文庫）である。「遊子方言」が「花折紙」に△小書いしやうつけのかい山▽と評された事は言う迄もないが、その方法の先達としてこの書がある。文例を示そう。

△入口に、おりしやうしべにはるとかき付ゝ女房ちやぞめの引かへしにむすびのひも二かきいづつもさげはんしの大　コレおさん八ツまう火かきたちやいふく帳をひかへ筆であたまかきく

ノフふ居ねぶる人てハ有ぞ　あいのいろあけのぬこ。ほそき帯。くひくろなるかわたび。カミ引こ　なんのいなさつきにむかいの金吾さんのしもやけのうへをたゝきなんしたいいさかい。あぶつてゐるのじやわいなゝ▽

小書衣裳附けは、既にこの如く完成していた。「新月花余情」は「陽台遺篇」等と同じく、「月花余情」（延享三年初板）の続編として書かれた物である事は、題名からも知れるが、現に、この三本を纏めて適当に改刻した物が△粹が酔たか▽と角書きして「さとの花」（加賀文庫）という外題の洒落本となっている。「月花余情」は当時から非常に有名な本で、一度絶板になったにも拘らず、宝暦八年にも再板され△遊里のあぢハひハ月花余情・色八卦、其外数多の粹書にあらハしたれば▽（列仙伝・宝暦十三年刊）と注目されている。その続編たる「新月花余情」を大坂人の丹波屋理兵衛が見なかつた筈もなからう。大坂人の理兵衛が書いたとすれば当然過ぎるほど当然な事とは言え、「遊子方言」には上方初期洒落本の血は非常に濃く流れているのである。

しかし「遊子方言」は江戸産れの書であるだけに、江戸の文芸の血筋も濃い事は、前記中村氏の言を引く迄もなく、談義本の粹談義を二・三説めば自ずと明らかである。ここに又一つ、小さな事ではあるが、書名は「吉原出世鑑」。宝暦四年刊の小本型江戸遊女評判記を採り上げる。その本文末の文章に

△何ニ而も今宵の評議ハ我等がためにハきがしれて徳右衛門殿茶代置たぞやとて帰しが、△はやしのゝめ明てからすハカア▽

これと「遊子方言」本文末の

△「女郎」かならずお出なせへ（またからす）心しらずや明の鐘△とを比較して見る。「遊子方言」の此の文章の締めくくりは、此の後非常に多くの洒落本に受けつがれ、所謂江戸前の文章の典型と見做されている。事は瑣末的だが「遊子方言」の家系を迎る何等かの手係りにはなるだろう。

ところで「遊子方言」の作者が大坂人の丹波屋理兵衛と略決定した今、内容・文章の上でそれを証拠づける物を探つて見る事も必要であろう。その点に留意して読み返したが、残念ながら、書かれている事柄からは、その大坂的な特徴を見出す事は出来ないようである。しかしそれも又当然で、吉原での遊びを書くのに何も大坂らしさを出す事はない。文章・用語の上ではその点最も期待出来るのだが、これも仲々馬脚を現はさぬ。考えて見れば、丹波屋は当然助手を仕うはづで、細かい用語や流行語等は猶更注意して直させただろう。その位の事は、現今の週刊紙作家でも実行する事である。用語の点でもあきらめねばならぬ。唯一つ言える事は、「遊子方言」の会話文体が以後の江戸洒落本と比べて非常に間伸びのした物だと言う事は、一読すれば、明らかだろう。特に△むすこ△の言葉つきなどに顯著である。

△そりやどふぞ。私が買とう御座ります。どふぞおまへつれ立て。ゐつておくん被成ますまいか△

△あいどふぞ。おまへの字を取てお付被成てくだされませ△
息子株の柔和さを出す為になぞと作ったとも考えられるが、それにしても上方の和事芝居を見る様な間伸びのした話体である。

従来も是は指摘されていたが、その理由としては、未だ会話体が定着しない故の幼なさであろうとされていた。しかし、明和六年刊の江戸板「郭中奇譚」は既に、会話体としての歯切れの良さを出す為に、呼掛けの詞や擬声語を多用する等の注意をめぐらしているのである。それとの比較によつて見てゆけば、案外私の意とする所も理解され易いかと思う。

翻つて、宝暦明和の洒落本界を見るに、上方絶体優位の時代から、次第に東西交流の気配の見え始めている事が注目し得る。先ず江戸の「両都妓品」(享保十八年刊)が島原の細見図を収載した事に始まり、やがて京板の「本朝色鑑」(宝暦初年刊)には、江戸の「両巴厄言」の影が色濃く現はれている。

そして、宝暦十二年には、江戸板「妬婦伝」(宝暦三年刊)を上方に移した「色道このてかしは」があらはれ、又「威妬醉裡」(宝暦十二年刊)なる談義本も、同じく妬女を大坂に連れ来た物であった。更に「月花余情」と「陽台遺篇」を合はせて江戸で出版した形跡のある「月花余情」異本(阪大・忍頂寺文庫)も、中村氏の「洒落本の発生」に詳しい。此の書は見返しに△風鈴先生泥郎△とあれば、これも又「妬婦伝」の著者と何等かの関係にある物と思はれる。更に「郭中奇譚」の上方板も多数現存する。

かかる出版物自体の交流と、更に丹波屋の項で述べた、当時の三都の出版部数の状況とを考へ合はせた時、若し、大坂の書肆丹波屋理兵衛の江戸移住、そして洒落本執筆という仮説が確定したならば、それは宝暦期出版界に於ける一つの象徴的事件となり得る物と考える。(一〇四頁に追記を記す)

紫」が、十返舎一九によって校合され、文政二年に「清談峯初花」前編として出版され、その成功に刺激されて文政四年、青林堂から「明烏後正夢」が出版されたとの考えも、当然否定されることになる。これだけの意味をもつ作品であったゆえに、やや好笑的な手続きをもって、私は、「明烏後正夢」初編が文政二年に出版されたことを考証したのである。

* 文政十年刊、「八大伝」第六輯附言に、曲亭馬琴は、火にかかった馬琴の旧著「勸善常世物語」・「三国一夜物語」の二書を、A一買堅Vがほしいままに補刻、翻刻して出版した。もとより馬琴に断るところがなく、当然その文章には誤りも多い。ところがA客歳湧泉堂Vが、そのA常語補刻の梓を購ひ得て、而して余に校訂を乞へりVと、記している。このA一買堅Vとは、馬琴が「作者部類」その他にはつきり春水であると述べているし、事実、「明烏後正夢」第三編の口絵の最後につける青林堂の出版書目には、A勸善つね世物語 五冊 曲亭馬琴作 溪斎英泉画 再板Vと見えている。ここから、青林堂板の再摺本「勸善常世物語」の板木が、湧泉堂の手に渡ったのは事実として認められる。

追記、底本丁子屋後摺本「明烏後正夢」初編には、また内題A老の巻Vと巻数を示す部分、各巻の回を示す部分がすべて埋木である。しかし、この詮索はさしあたって本論文に関係ないので省いた。また、丁子屋平兵衛は、天保十一年に序文、口絵の多くを改刻して、本文は同じ板木を用いて「明烏後正夢」・「明烏発端」・「明烏寢覚練言」のすべてを出版して

おり、さらに同じ板木を用いて天保改革後の後摺本もあり、維新後、この明烏シリーズの板木は大阪の前川源七郎の手に渡り、さらに後摺りされている。附記しておく。

また、年表によれば、「明烏発端」は天保十一年に「教訓郭里の東雲」と改題再版されたところがあるが、誤りである。天保四年ごろ、「明烏後正夢」初編が丁子屋平兵衛によって後摺りされたとき、おなじく後摺本として出版され、このときすでにA教訓郭里の東雲Vの内題をもち、内題下の作者名は、A松亭金水稿本 為永春水筆刪Vとなっていたのである。画工の推定その他で、鈴木重三氏に多く御教示をえた。附記して感謝いたします。

追記（九五頁よりつづく）

国会図書館蔵「狂歌不断笑」の奥附は次の如くである。

寛延三年仲夏吉祥日

大坂心斎橋南詰東側

丹波屋平兵衛板

江戸堀江町

丹波屋理兵衛

そして、この中央三分行は埋木である事明らかである。天理本奥附（表①）と比べた時、大坂と江戸の丹波屋理兵衛が同一人であり、大坂での理兵衛の板権を平兵衛が引継いだものとする私の仮説は一応の裏付けを得た事になると思う。

（埋木等の問題については鈴木重三氏の御指教を受けた）